

山越しの阿弥陀像の画因

折口信夫

青空文庫

極楽の東門に 向ふ難波の西の海 入り日の影も 舞ふとか
や

渡来文化が、渡来当時の姿をさながら持ち伝えていると思われながら、いつか内容は、我が国生得のものとなりかわっている。そうした例の一つとして、日本人の考えた山越しの阿弥陀像あみだぞうの由来と、之が書きたくなった、私一個の事情をここに書きつける。

「山越しの弥陀をめぐる不思議」——大体こう言う表題だったと思う。美術雑誌か何かに出たのだろうと思われる抜き刷りを、人から貰うて読んだのは、何でも、昭和の初めのことだった。大倉桑馬さんという人の書かれたもので、大倉集古館におさまって居

る、冷泉為恭筆の阿弥陀来迎らいごうず図についての、思い出し咄ばなしだった。不思議と思えば不思議、何でもないとさえ何のこともなさそうな事実譚たんである。だがなるほど、大正のあの地震に遭うて焼けたものと思いきや、居たのが、偶然助かって居たとすれば、関係深い人々にとつては、——これに色んな聯れん想そうもつき添うとすれば、奇蹟談の緒いとぐち口くちにもなりそうなことである。喜八郎老人の、何の気なしに買うて置いたものが、為恭のだと知れ、其上、その絵かき——為恭の、画人としての経歴を知って見ると、絵に味が加つて、愈いよいよ、何だか因縁らしいものの感じられて来るのも、無理はない。

古代仏画を摸写もしゃしたことがある、大和絵出やまとえの人の絵には、どうし

ても出て来ずには居ぬ、極度な感覚風なものがあるのである。宗
教画に限つて、何となくひそかに、愉樂しているような領域があ
るのである。近くは、吉川靈華を見ると、あの人の閱歴に不似合
いだと思われるほど濃い人間の官能が、むつとする位つきまとう
て居るのに、氣のついた人はあろうと思う。為恭にも、同じ理由
から出た、おなじ気持ち——音楽なら主題というべきもの——が
出ている。私は、此絵の震火をのがれるきつかけを作つた靄山半
三郎さんほどの熱意がないと見えて、いまだに集古館へ、この絵
を見せて貰いに出かけて居ぬ。話は、こうである。ある日、一人
の紳士が集古館へ現れた。此画は、ゆつくり拝見したいから、別
の処へ出して置いて頂きたいと頼んで歸つた。其とおりはかろう

て、そのまま地震の日が来て、忘れたままに、時が過ぎた、と此れが発端である。正しょうの物を見たら、これはほんとうに驚くのかも知れぬが、写真だけでは、立体感を強いるような線ばかりが印象して、それに、むっちりとした肉ししおきばかりを考えて描いているような気がして、むやみに僧房式な近代感を受けて為しかた方がなかつた。其に、此はよいことともわるいこととも、私などには断言は出来ぬが、仏像を越して表現せられた人間という感じが強過ぎはしなかつたか、と今も思っている。

この絵は、弥陀仏の腰から下は、山の端に隠れて、其から前の画面は、すっかり自然描写——というよりも、壺つぼせんざい前裁を描いたとというような図どりである。一番心の打たれるのは、山の外輪に添

うて立ち並ぶ峰の松原である。その松原ごしに、阿弥陀は出現している訣わけであつた。十五夜の山の端から、月の上つて来るのを待ちつけた気持ちである。下は紅葉があつたり、滝をあしらつたりして、古くからの山越しの阿弥陀像の約束を、活いかそうとした古典絵家の意趣は、併しながら、よく現れている。

此は、為恭の日記によると、紀州根来ねころに隠れて居た時の作物であり、又絵の上端に押し置き式紙の処に書いた歌から見ても、阿弥陀の靈験によつて今まで遁のがれて来た身を、更に救うて頂きたいという風の熱情を思い見ることが出来る。だから、漫然と描いたものではなかつたと謂いえる。心願を持って、此は描いたものなのだ。其にしては絵様は、如何にも、古典派の大和絵師の行きそう

な楽しい道をとっている。勿論、個人としての苦悶くもんの痕あとなどが、
そうそう、絵の動機に浮んで見えることは、ある筈がない。絵は
絵、思いごとと思いごとと、別々に見るべきものなることは知れ
ている。為恭は、この絵を寺に留めて置いて、出かけた旅で、浪
士の刃に、落命したのであった。

今こうして、写真を思い出して見ると、弥陀の腰から下を没して
いる山の端の峰の松原は、如何にも、写実風のかき方がしてあつ
たようだ。そうして、誰でも、こういう山の端を仰いだ記憶は、
思い起しそうな気のする図どりであつた。大和絵師は、人物より
も、自然、装束の色よりも、前栽の花や枝をかくと、些すこしの不安
もないものである。

私にも、二十年も前に根来・粉川あたりの寺の庭から仰いだ風かざら
 猛山まぎ一帯の峰の松原が思い出されて、何かせつない気がした。

滝や、紅葉のある前景は、此とて、何処にもあるというより、大和絵の常の型に過ぎぬが、山の林泉の姿が、結局調和して、根来寺あたりの閑居の感じに、適して居る気がするのではなからうか。さて其後、大倉集古館では、何ということなく、掛けて置いたところ、その地震前日の紳士が、ふらりと姿を顕あらわして実は之を別の処に出して置いて、静かに拝ましてくれというたのは、自分だったと名のるといふ後日譚になり、其が、靱山さんだったという事になって、又一つ不思議がつき添うて来る、ということになるのだが、此とても、ありそうな事が、狭い紳士たちの世間に現れ

て来た為に、知遇の縁らしいものを感じさせたに過ぎぬ。が、大倉一族の人々が、此ほど不思議がったというのには、理由らしいものがまだ外にあるのであつた。事に絡んで、これはこれと驚くと同時に、山越しの弥陀の信仰が保つて来た記憶——そう言うものが、漠然と、此人々の心に浮んだもの、と思つてもよいだろう。一家の中にも、喜六郎君などは、暫時ながら教えもし、聴きもした仲だから、外の族人よりは、この咄のとおりもよいだろう。どんな不思議よりも、我々の、山越しの弥陀を持つようになった過去の因縁ほど、不思議なものはまず少い。誰ひとり説き明すことなしに過ぎて来た画因が、為恭の絵を借りて、えときを促すように現れて来たものではないだろうか。そんな気がする。

私はこういう方へ不思議感を導く。集古館の山越しの阿弥陀像が、一つの不思議を呼び起したというよりも、あの弥陀来迎図を廻つて、日本人が持つて来た神秘感の源頭が、震火の動揺に刺激せられて、目立つて来たという方が、ほんとうらしい。

なぜこの特殊な弥陀像が、我々の国の芸術遺産として残る様になつたか、其解き棄てになつた不審が、いつまでも、民族の宗教心・審美観などといえは大きだが、何かのきっかけには、駭然がいぜんとして目を覚ます、そう謂つたあり様に、おかれてあつたのではないか。だから事に触れて、思いがけなく出て来るのである。そう思えば、集古館の不思議どころでなく、以前には、もつと屢しばしばそう言う宗教心を衝激したことがあつたようである。手近いとこ

ろでは、私の別にものした中将姫の物語の出生なども、新しい事は新しいが、一つの適例と言う点では、疑いもなく、新しい一つの例を作った訣わけなのである。

だが其後、おりおりの感じというものがあつて、これを書くようになった動機の、私どもの意識の上に出なかつた部分が、可なり深く潜んでいそうな事に気がついて来た。それが段々、姿を見せて来て、何かおもしろおかしげにもあり、気味のわるい処もあつたりして、私だけにとどまる分解だけでも、試みておきたくなつたのである。今、この物語の訂正をして居て、ひよつと、こう言う場合には、それが出来るのかも知れぬという気がした。——其だけの理由で、しかも、こう書いていることが、果してぴつたり、

自分の心の、深く、重たく折り重った層を、からりからりと跳ねのけて、はつきり単純な姿にして見せるか、どうかもそれは訣わからぬのである。

日本人総体の精神分析の一部に当ることをする様な事になるかも知れぬ。だが決して、私自身の精神を、分析しようなどとは思つても居ぬし、又そんな演えん繹えき式な結果なら、して見ぬ先から訣つていような気もするのだから、一向して見るだけの気のりもせなんだのである。

私の物語なども、謂いわば、一つの山越しの弥み陀だをめぐる小説、といつでもよい作物なのである。私にはどうも、気の多い癖に、又一つ事に執する癖がありすぎるようである。だが、そう言うては

うそになる。何事にも飽き易く、物事を遂げたことのない人間なのだけれど、要するに努力感なしに何時までも、ずるずるべつたりに、くつついて離れぬという、ふみきりがわるいと言おうか、未練不覚の人間といおうか、ともかく時には、驚くばかり一つ事に、かかわっている。旅行なども、これでわりにする方の部に入るらしいが、一つ地方にばかり行く癖があつて、今までに費した日数と、入費をかければ、凡日本の奥在家・島陰の村々までも、あらかたは歩いている筈である。それがそうなつて居ぬのは、出たとこ勝負に物をするという思慮の浅さと、前以てものを考えることを、大儀に思うところから来るのは勿論だが、どうも一つ事から、容易に、気分の離れぬと言う性分が、もとになつている様

である。

さて、今覚えている所では、私の中將姫の事を書き出したのは、

「神の嫁」という短篇未完のものがはじめである。此は大正十年時分に、ほんの百行足らずの分量を書いたきり、そのままになっている。が、横佩垣よこはきかきつ内うちの大臣家の姫の失踪しつそう事件を書こうとして、尻きれとんぼうになった。その時の構図は、凡すべてけろりと忘れてたようなあり様だが、藕糸曼陀羅ぐうしまんだらには、結びつけようとはしては居なかつたのではないかと思う。

その後もどうかすると、之を書きつごうとするのか、出直して見ようと言うのか、ともかくもいろいろな発足点を作って、書きかけたものが、幾つかあった。そうして、今度のえじぶともどきの

本が、最後に出て来たのである。別に、書かねばならぬと言うほどの動機があつたとも、今では考え浮ばぬが、何でも、少し興が浮びかけて居たというのが、何とも名状の出来ぬ、こぐらかつたような夢をある朝見た。そうしてこれが書いて見たかつたのだ。書いている中に、夢の中の自分の身が、いつか、中将姫の上になつていたのであつた。だから私から言えば、よほど易い路へ逃げこんだような気が、今におきしている。ところが、亡くなつた森田武彦君という人の奨めすすで、俄にわかに情熱らしいものが出て来て、年の暮れに箱根、年あけて伊豆大仁おおひとなどに籠こもつて書いたのが、大部分であつた。はじめは、此書き物の脇役になる滋賀津彦に絡んだ部分が、日本の「死者の書」見たようなところがあるので、

これへ、聯想れんそうを誘う為に、「穆天子伝ぼくてんしでん」の一部を書き出しに添えて出した。そうして表題を少しひねってつけて見た。こうすると、倭わ・漢・洋の死者の書の趣きが重つて来る様で、自分だけには、気がよかつたのである。

そうする事が亦、何とも知れぬかの昔の人の夢を私に見せた古い故人の為の罪障消滅の営みにもあたり、供養にもなるという様な気がしていたのである。書いている内の相当な時間、その間に一つも、心に浮ばなんだ事で、出来上つて後、段々ありありと思ひ出されて来た色々の事。まるで、精神分析に關聯した事のようにでもあるが、潜在した知識を扱うのだから、其とは別だろう。が元々、覚めていて、こんな白日夢を濫書するのは、ある感情が潜在

しているからだ、と言われれば、相当病心理研究の材料になるかもしれない。が、私のするのは、其とは、違うつもりである。もつとしかつめらしい顔をして、仔細しさいらしい事を言おうとするのである。だから、書かぬ先から、余計な事だと言われそうな気おくれがする。

まず第一に、私の心の上の重ね写真は、大した問題にするがものはない。もつともつと重大なのは、日本人の持つて来た、いろいろな知識の映像の、重つて焼きつけられて来た民俗である。其から其間を縫うて、尤もつともらしい儀式・信仰にしあげる為に、民俗民俗にはたらいた内存・外来の高等な学の智慧である。

当麻たぎま信仰には、妙に不思議な尼や、何ともわからぬ化身の人が出

る。謡の「当麻」にも、又其と一向関係もないらしいもので謂つても、「朝顔の露の宮」、あれなどにも、やはり化尼けにが出て来る。曼陀羅縁起以来の繋つなりあいらしい。私の場合も、語部かたりべの姥うばが、後に化尼の役になって来ている。

此などは、確かに意識して書いたように覚えている。その発端に何ということなしに、ふつと結びついて来たのだから、やはりそう言うことになるかも知れぬ。が、人によつては、時がたてば私自身にも、私の無意識から出た化尼として、原因をここに求めそうな気がする。それはともかくも、実際そんな風に計画して書いて行くと、歴史小説というものは、合理臭い書き物から、一步も出ぬものになってしまう。

岡本綺堂の史劇というものは、歴史の筋は追うていても、如何にも、それ自体、微弱感を起させる歴史であつた。其代りに、読本作者のした様な、史実或は伝説などの合理化を、行つて見せた。その同じ程度の知識は、多くの見物にも予期出来るものであつて、そうした人達は、見ると同時に、作者の計画を納得するという風に出ていた。其が、綺堂の新歌舞伎狂言の行われた理由の一つでもあつた。何しろ、作者と、読者・見物と並行しているという事は、大衆を相手にする場合には、余程強みになるらしい。その書き物も、其が歴史小説と見られる側には十分、読本作者や、戯曲における岡本綺堂が顔を出して居る。だが、私共の書いた物は、歴史に若干関係あるように見えようが、謂わば近代小説である。

併し、舞台を歴史にとつただけの、近代小説というのでもない。近代観に映じた、ある時期の古代生活とでもいうものであろう。老語部を登場させたのは、何も之を出した方が、読者の知識を利用することが出来るからと言うのではない。殆無意識に出て来る類型と扱ふ所のない程度で、化尼になる前型らしいものでも感じて貰えればよいと思うたのだ。こんな事をわざわざ書いておくのは、此後に出て来る数个^か条の潜在するものはたらきと、自分自身混乱せぬよう、自分に言い聞かせるような気持ちでする訣である。

称讚浄土仏撰^{しょうじゆぎょう} 受経^{じゆきやう}を、姫が読んで居たとしたのは、後に出て来る当麻曼陀羅の説明に役立てようと言う考えなどはちつとも

なかつた。唯、この時代によく読誦どくしようせられ、写経せられた簡易な経文であつたと言うのと、一つは有名な遺物があるからである。ところが、此経は、奈良朝だけのことではなかつた。平安の京になつても、慧心僧都えしんそうずの根本信念は、此経から来ていると思われるのである。ただ、伝説だけの話では、なかつたのである。此聖生ひじりは、大和葛上郡——北葛城郡——当麻村というが、委くわしくは首しゅ邑ゆ当麻を離るること、東北二里弱の狐井・五位堂のあたりであつたらしい。ともかくも、日夕ふたかみやま二上山の姿を仰ぐ程、頃合いな距離の土地で、成人したのは事実であつた。

ここに予め言うておきたいことがある。表題は如何ともあれ、私は別に、山越しの弥陀みだの図の成立史を考えようとするつもりでも

なければ、また私の書き物に出て来る「死者」の倂おもかげが、藤原南なんげ家郎女いらつめの目に、阿弥陀仏とも言うべき端巖微妙な姿と現じたと言いう空想の抛り所を、聖衆来迎しやうじゆらいごうず図に出たものだ、と言おうとするのでもない。そんなものものしい企ては、最初から、しても居ぬ。ただ山越しの弥陀像や、彼岸中日の日想観の風習が、日本固有のものとして、深く仏者の懐に採り入れられて来たことが、ちつとでも訣わかつて貰えれば、と考えていた。

四天王寺西門は、昔から謂いわれている、極楽東門に向つていゝところで、彼岸の夕、西の方海遠く入る日を拝む人の群集くんじゆしたところ、凡およそ七百年ほどの歴史を経て、今も尚若干の人々は、淡路の島は愚か、海の波すら見えぬ、煤すすふる西の宮に向つて、くるめき入

る日を見送りに出る。此種の日想観なら、「弱法師よろぼうし」の上にも見えていた。舞台を何とも謂えぬ情趣に整えていると共に、梅の花咲き散る頃の優なる季節感が靡なびきかかっている。

しかも尚、四天王寺には、古くは、日想観往生と謂われる風習があつて、多くの篤信者の魂が、西方の波にあくがれて海深く沈んで行つたのであつた。熊野では、これと同じ事を、普陀落渡海ふだらくとかいと言つた。観音の浄土に往生する意味であつて、森々びようびようたる海波を漕こぎきつて到り著つく、と信じていたのがあわれである。一族と別れて、南海に身を潜めた平維盛これもりが最期も、此渡海の道であつたという。

日想観もやはり、其と同じ、必極楽東門に達するものと信じて、

謂わば法悦からした入水死じゆすいしである。そこまで信仰においつめられたと言うよりも寧むしろ、自ら靈たまのよるべをつきとめて、そこに立ち到つたのだと言う外はない。そう言うことが出来るほど、彼岸の中日は、まるで何かを思いつめ、何かに誘おびかれたようになって、大空の日を追うて歩いた人たちがあつたものである。

昔と言うばかりで、何時と時をさすことは出来ぬが、何か、春と秋との真中頃に、日祀ひまつりをする風習が行われていて、日の出から日の入りまで、日を迎え、日を送り、又日かげと共に歩み、日かげと共に憩う信仰があつただけは、確かでもあり又事実でもあつた。そうして其なごりが、今も消えきらずにいる。日迎え日送りと言うのは、多く彼岸の中日、朝は東へ、夕方は西へ向いて

行く。今も播州に行われている風が、その一つである。而も其間に朝昼夕と三度まで、米を供えて日を拝むとある。(柳田先生、歳時習俗語彙) 又おなじ語彙に、丹波中郡で社日参りというのは、此日早天に東方に当る宮や、寺又は、地藏尊などに参つて、日の出を迎え、其から順に南を廻つて西の方へ行き、日の入りを送つて後、還つて来る。これを日の伴と謂っている。宮津辺では、日つてんさまの御伴おともと称して、以前は同様の行事があつたが、其は、彼岸の中日つてんさまにすることになつていた。紀伊の那智郡では唯おともと謂う……。こうある。

何の訣わけとも知らず、社日や、彼岸には、女がこう言う行ぎようの様なことをした。又現に、してもいるのである。年の寄つた婆さまたち

が主となつて、稀まれに若い女たちがまじるようになったのは、単に旧習を守る人のみができるだけになつたと言うことで、昔は若い女たちが却かえつて、中心だつたのだらうと思われる。現にこの風習と、一緒にしてしまつて居る地方の多い「山ごもり」「野遊び」のし來りきたは、大抵娘盛り・女盛りの人々が、中心になつていたのである。順礼等と言つて、幾村里かけて巡拝して歩くことを春の行事とした、北九州の為來りも、やはり嫁入り前の娘のすることであつた。鳥居を幾つ綴つて來るとか言つて、菜の花桃の花のちらちらする野山を廻つた、風情ある女の年中行事も、今は消え方になつてゐる。

そんなに遠くは行かぬ様に見えた「山ごもり」「野あそび」にも、

一部はやはり、一个処かに集り、物忌みするばかりでなく、我が里遙かに離れて、短い日数の旅をすると謂う意味も含まつて居たのである。こう言う「女の旅」の日の、以前はあつたのが、今はもう、極めて微かな遺風になつてしまつたのである。

併し日本の近代の物語の上では、此仄ほのかな記憶がとりあげられて、出来れば明らかにしようと言う心が、よほど大きくひろがつて出て来て居る。旅路の女の数々の辛苦の物語が、これである。尋ね求める人に廻りあつても、其とは知らぬあわれな筋立てを含むことが、此「女の旅」の物語の条件に備つてしもうたようである。女が、盲目でなければ、尋ねる人の方がそうであつたり、両眼すずやかであつても行きちがい、尋ねあてて居ながら心づかずにい

たりする。何やら我々には想像も出来ぬ理由があつて、日を祀る
修道人が、目めくるめ眩く光りに馴れて、現うつし世の明を失つたと言う風
の考え方があつたものではないか知らん。

私どもの書いた物語にも、彼岸中日の入り日を拝んで居た郎女が、
何時おのずかか自ら遠旅におびかれ出る形が出て居るのに気づいて、思い
がけぬ事の驚きを、此ごろ新にしたところである。

山越しの阿弥陀像の残るものは、新旧を数えれば、芸術上の逸品
と見られるものだけでも、相当の数にはなるだろう。が、ことごと悉く所
伝通り、すべて凡慧心僧都以後の物ばかりと思われて、優れた作もあり
ながら、何となく、気品や、風格において高い所が欠けているよ
うに感じられる。唯如何にも、空想に富んだ点は懐しいと言える

ものが多い。だが、脇立ちその他の聖衆の配置や、恰好かつこうに、宗
教画につきものの俗めいた所がないのではないのが寂しい。何と言
つても、金戒光明寺のは、伝来正しいらしいだけに、他の山越し
像を圧する品格がある。其でも尚、小品だけに小品としての不自
由らしさがあつて、彫刻に見るような堅い線が出て来ている。両
手の親指・人さし指に五色の糸らしいものが纏まとわれている。此は
所謂いわゆる「善の綱」に当るもので、此図の極めて実用式な目的で、
描かれたことが思われる。唯この両手の指から、此画の美しさが、
俄にわかに陥落してしまう気がする。其ほど救い難い功利性を示して
いる。此図の上に押した色紙に「弟子天台僧源信。正暦甲午歳冬
十二月……」と題して七言律一首が続けられている。其中に「：

：光芒忽自眉間照。音楽新発耳界驚。永別故山秋月送。遥望浄土
 夜雲迎」の句がある。故山と言うのは、浄土を斥さしているものと
 思えるが、尚意の重複するものが示されて、慧心院の故郷、二上
 山の麓ふもとを言うていることにもなりそうだ。

此図の出来た動機が、此詩に示されているのだろうから、我々は
 もつと、「故山」に執して考えてよいだろう。浄土を言い乍ながら同
 時に、大和当麻を思っていると見てさし支えはない。此図は唯上
 の題詞から源信僧都の作と見るのであるが、画風からして、一条
 天皇代の物とすることは、疑われて来ている。さすれば色紙も、
 慧心作を後に録したものと見る外はないようだ。

一体、山越し阿弥陀像は比叡よがわの横川で、僧都自ら感得したものと

伝えられている。真作の存せぬ以上、この伝えも信じることはむつかしいが、まず凡そ言う事のありそうな前後の事情である。図は真作でなくとも、詩句は、尚僧都自身の心を思わせているということとは出来る。横川において感得した相好とすれば、三尊仏の背景に当るものは叡山東方の空であり、又琵琶の湖が予想せられていゝるもの、と見てよいだろう。聖衆来迎図以来背景の大和絵風な構想が、すべてそう言う意図を持っているのだから。併し若し更に、慧心院真作の山越し図があり、又此が僧都作であつたとすれば、こんなことも謂えぬか知らん。この山の端と、金色の三尊の後に当る空と、漣さざなみとを想像せしめる背景は、実はそうではなかつた。

禅林寺のは、製作動機から見れば、稍後出ややを思わせる発展がある。併し画風から見て、金戒光明寺のよりも、幾分古いものと、凡判およそ断せられて居る。さすれば両者とも、各今少し先出の画像があり、其型の上に出て来たものなることが想像出来る。此方は、金戒光明寺の図様が固定する一方、その以前に既に変化を生じて居たものの分出と見ることが出来る。但中尊の相好は、金戒光明寺のよりも、粗朴であり、而も線の柔軟はあるが、脇士わきじ・梵天ぼんてん・帝たいし釈やく・四天王等の配置が浄土曼陀羅風まんだらといえは謂えるが、後代風の感じを湛たえている。其を除けると、中尊の態様、殊に山の端に出た、胸臆のずっしりした重さは如何にも感覚を通して受けた、弥陀みだらしさが十分に出ていて、金戒光明寺の作りつけた様なのと

は違う。其に山の姿もよい。若し脇士を仮りに消して想像すれば、更に美しい山容である。此山、此山肌の感触はどうも、写実精神の出した山である。

これで見ると、山の端に伸^のしあがった日輪の思われる阿弥陀の姿である。古語で雲居というのは、地平線水平線のことだが、山の端などでも、夕日の沈む時、必見ることである。一度落ちかけた日が、ぬっと伸しあがって来る感じのするものだが――、この絵の阿弥陀仏には、実によく、其気味あいが出ている。容貌の点から言うと、金戒光明寺の方が遥かに美男らしいが、直線感の多い描線に囲まれただけに、ほんとうのふくらみが感じられぬ。こちらには、阿弥陀というよりは、地蔵菩薩^{ぼさつ}と謂えば、その美しさは認

められるだろう。腹のあたりまでしか出ていぬが、すつくと立つた全身の、想見出来るような姿である。ところが其優れた山の描写が亦、最異色に富んで居る。峰の二上山形に岐わかれている事も、此図に一等著しい。金戒光明寺の来迎らいごうず図は、唯の山の端を描いたばかりだし、其から後のものは、峰の分れて見えるのは、凡そすべてこから道が通じて、聖衆が降つて来るように描かれている。雲に乗つて居ながら、何も谷間の様な処を通つて来るにも及ばぬ訣わけである。禅林寺の方で見ると、二脇士は山の曲たわに関係なく、山肌の上を降つて来る様に見える。上野家や川崎家では、今も言つた来迎の山を「二上」型に描く習慣が脱却出来ず、而も何の為に、其ほどに約束を守らねばならぬか訣わからずなつた為に、聖衆降臨の

途次といった別の目的を、見つけることになつたと見る外はない。上野家蔵のも相好の美しさ、中尊の姿態の写実において優れているのや、川崎家旧蔵の山越図の古朴な感じが充ち、中尊仏の殊に上体と山とのかんれん関聯に、日想觀を思わせるものが、十分に出て居るが、二つ乍らなが聖衆と中尊との関聯の上に、稍不自然な処がある。即、阿弥陀は山の端に留り、聖衆ばかり動いていると謂つた画様の川崎家の物や、何やら、中尊の背後にした聖衆の動靜に來迎図離れの感じられる上野氏の物、特に後者は、阿弥陀の立像を膝元近くで画いたところに、山越し像の新様式の派出所を示している。なぜなら、そうなると西に沈む日の姿が、よほど態様を変えて來ることになるからだ。而も、此図に見られる一つの異点は、阿弥

陀浄土変相図に近づいて居ることである。こうなつて来ると、私などにも「山越し」像の画因は、やつとつかむことが出来るのではないかと思う。

大串純夫さんに、来迎芸術論（国華）と言う極めて甘美な暗示に富んだ論文があつて、この稿の中途に、当麻寺の松村実照師に示されて、はじめて知つたのだが、反省の機会が与えられて、感謝している。此には、山越し像と、来迎図との関聯、来迎図と御迎講又は来迎講と称すべきものとの脈絡を説いて、中世の貴族庶民に渉るわた宗教情熱の豊けさが書かれている。唯一点、私^が之に加えるなら、大串さんのひきおろした画因——宗教演劇にも近い迎え講の儀式の、芸術化と言う所から、更にずっと、卸して考えるこ

とである。

山越し像において、新しいほど、御迎講の姿が、画因に認められるのに、古いほど却て来迎図の要素たる聖衆が少くなつて、唯の三尊仏と言うより、其すら脇士なるが故に伴うているだけで、眼目は中尊にあると言う傾向がはつきり見えるのは、其が唯阿弥陀三尊に止るなら、問題はない。阿弥陀像には、自ら約束として、両脇士の随したがうものなのだから。ところが、之に附随して山の端の外輪が胸のあたりまで掩おおうていることになる、そう簡単には片づかぬ。常に来迎が山上から、たなびく紫雲に乗って行われ易いと考えたにしても、画面は必しも、其ばかりではない。

慧心の代表作なる、高野山の廿五菩薩来迎図にしても、興福院こんぶいん

の来迎図にしても、知恩院の阿弥陀十体像にしても、皆山から来向う迅雲に乗った姿ではない。だから自ら、山は附随して来るであろうが、必しも、最初からの必須条件でないといえる。其が山越し像を通過すると、知恩院の阿弥陀二十五菩薩来迎像の様な、写実風な山から家へ降る迅雲の上に描かれる様になるのである。結局弥陀三尊図に、山の端をかき添え、下体を隠して居る点が、特殊なのである。謂わば一抹の山の端線あるが故に、簡素乍らの浄土変相図としての条件を、持って来る訣なのである。即、日本式の弥陀浄土変として、山越し像が成立したのである。ここに伝説の上に語られた慧心僧都の巨大性が見られるのである。

山越し像についての伝えは、前に述べた叡山側の説は、山中不二

峰において感得したものと云われているが、其に、疑念を持つことが出来る。

観經曼陀羅の中にも、内外陣左辺右辺のとり扱いについて、種々の相違はあるようだが、定善義十三観の中、最重く見られているのが、日想観である。海岸の樹下に合掌する韋提希夫人いだいけぶんあり、婢女一人之に侍立し、樹上に三色の雲かかり、正中上方一線の霞の下に円日あり、下に海中島ある構図である。当麻の物では、外陣左辺十三段のはじめにある。即、西方に沈もうとする日を、観じている所なのだ。浄土を観念するには、この日想観が、緊密妥当な方法であると考えたのが、中世念仏の徒の信仰であった。観無量寿經に、「汝及び衆生まよに心を専らにし、念を一処に繋けて、

西方を想ふべし。云はく、何が想をなすや。凡想をなすとは、一切の衆生、生盲に非るよりは、目有る徒、皆日没を見よ。当に想念を起し、正坐し西に向ひて、日を諦あきらかに觀じ、心を堅く住せしめ、想を専らにして移らざれ。日の歿ぼつせむとするや、形、鼓を懸けたる如きを見るべし。既に見已をへば目を閉開するも、皆明了ならしめよ。是を日想となし、名づけて、初觀といふ。「そうして水想觀・宝地觀・宝樹觀・宝池觀・宝樓觀と言う風に続くのである。ところが、此初觀に先行している画面に、序分義化前縁の段がある。王舎城耆闍崛山に、仏大比丘衆おおびく一千二百五十人及び許あ多またの聖衆と共に住んだ様を圖したものである。右辺左辺と、位置を別またにしているが、順序として、定善義第一日想觀に続く様に解

せられる所から、何かの関聯が、考えられて居たのでないかと思
う。強いて、曼陀羅の中から、山越し像の画因を引き出そうとす
れば、これがまず、或暗示を含んでいるとは言えよう。雲湧き立
つ山下に、仏を囲んで、聖衆・大比丘のある所である。山の此方
にあるのが違うのだが、此違いは大きな違いである。日想観及び
次の水想観には、ただ韋提希夫人觀念の姿を描いたのみであるが、
其より先は、如来・菩薩の示現を描いている。日想観において観
じ得た如来の姿を描くとすれば、西方海中に没しようとする懸鼓
の如き日輪を、心しんにして写し出す外はない。さすれば、水平線に
半身を顕あらわし、日輪を光背とした三尊を描いたであろう。だが、此
は単に私どもの空想であつて、いまだ之を画因にした像を見ぬの

である。併しながら、今も尚、彼岸中日海中にくるめき沈む日を
拝する人々は、——即庶人の日想觀を行ずる者——落日の車輪の
如く廻転し、三尊示現する如く、日輪三体に分れて見えると言っ
て、拝みに出るのである。

此日、来迎仏と觀ずる日輪の在る所に行き向えば、必その迎えを
得て、西方浄土に往生することになる、と考えたのは当然過ぎる
信仰である。此は実践する所の習俗として残っていて、而も、伝
説化・芸術化することなくして、そのまま消えて行つたのである。
その消滅の径路において、彼岸の落日を拝む風と、落日を追うて
海中に没入することと、また少くとも彼岸でなくとも、法悦は遂
げられるという入水死じゆすいしの風習とに岐わかれて行つたのである。

ここで山越し像に到る間を、少し脇路に踏ふみ入ることにしたい。さて、此日東の大きな古国には、日を拝む信仰が、深く行われていた。今は日輪を拝する人々も、皆ある種の概念化した日を考えているようだが、昔の人は、もっと切実な心から、日の神を拜んで居た。

宮廷におかせられては、御代みよ御代の尊い御方に、近侍した舎人とねりたちぎょうが、その御宇御宇の聖蹟を伝え、その御代御代の御威力を現実ぎょうじに示す信仰を、諸方に伝播でんぱした。此が、日奉部ひまつりべ（又、日祀部ひまつりべ）なる聖職の団体で、その舎人出身なるが故に、詳しくは日奉大舎人部とも言うた様である。此部曲かきべの事については、既に前年、柳田先生が注意していられる。之と日置部・置部など書いたひおき

べは後代算盤そろばんの上で、ある数にあたる珠たまを定置することになつてゐるが、大体同じ様な意義に、古くから用いてゐる。源為憲の「口遊くゆう」に、「術に曰いはく、婦人の年数を置き、十二神を加へて実と為し…」だの、「九々八十一を置き、十二神を加へて九十三を得……」などとある。此は算盤を以てする卜法ほくほうである。置くなる算法が、日置の場合、如何なる方法を以てするか、一切明らかでないが、其は唯實際方法の問題で、語原においては、太陽並びに、天体の運行によつて、歳時・風雨・豊凶を卜知することを示してゐるのは明らかである。

此様に、日を計つてする卜法が、信仰から遊離するまでには、長い過程を経て來てゐるだろうが、日神に対する特殊な信仰の表現

のあつたのは疑われぬ。其が、今日の我々にとって、不思議なものであつても、其を否む訣わけには行かぬ。既に述べた「日の伴ひとも」のなつかしい女風俗なども、日置法と関聯する所はないだろうが、日祀りの信仰と離れては説かれぬものだということは、凡考およそえていてよからう。

其に今一つ、既に述べた女の野遊び・山籠やまごもりの風である。此は専ら、五月の早処さおとめ女となる者たちの予めする物忌みと、われ人にもに考えて来たものである。だが、初めにも述べた様に、一処に留らず遊歴するような形をとることすらあるのを見ると、物忌みだけにするものではなかつたのであろう。一方にこうした日ひをひかげ追う風の、早く埋没した俤おもかげを、ほのか乍ながら窺うかがわせているというも

のである。

昔から語義不明のまま、訣わかった様な風ですまされて来た「かげのわずらい」と謂いった離魂病なども、日を追うてあくがれ歩く女の生活の一面の長い観察をして来た社会で言い出した語ではないか。其でなくては、此病氣は、陰影を亡くするという意味でもなく、「わが身は陰となりにけり」の実体を失う程瘦やせると言うことでもない。だからなぜそう呼び習したか、此意味ならではわからぬことになる。

比叡坂本側の花摘はなつみの社やしろは、色々の伝えのあるところだが、里の女たちがここまで登って花を摘み、序ついでにこの祠ほこらにも奉ったことは、確かである。而も山籠りして花をつむと言うことは、必しも一つ

の隠れどころにじつとして居ることではなく、てんでに思い思いの峰谷を涉わたつてあるくこともあつた、ただの物忌みの為ばかりでもないようだ。女たちの馳かけまわる範圍が、野か、山の中に限られて、里つづきの野道・田の畦あぜなどを廻らぬところから、伝えなかつたまでであろう。日の伴の様な自由な野行き山行きは、まだ土地が、幾つとも知らぬ郡村に地割りせられぬ以前からの風であつたのである。如何ほど細かに、村境・字境がきまるようになって、春の一日を馳け廻る女人にとつては、なかなか太古の土地を歩くと、同じ気持ちは抜けきらなかつたであろう。それ故と言うより、そうした習俗だけが、時代を超えて残つて居た訣なのである。此ように、幾百年とも知れぬ昔から、日を逐おうて西に走せ、

終つひに西山・西海の雲居に沈むに到つて、之を礼拝して見送つたわが国の韋提希夫人が、幾万人あつたやら、想像に能あたわぬ、永い昔である。此風が仏者の説くところに習合せられ、新しい衣を装うに到ると、其処にわが国での日想観の様式は現れて来ねばならぬ訣である。

日想観の内容が分化して、四天王寺専有の風と見なされるようになった為、日想観に最適切な西の海に入る日を拝むことになつたのだが、依然として、太古のままの野山を馳けまわる女性にとつては、唯東に昇り、西に没する日があるばかりである。だから日想観に合理化せられる世になれば、此記憶は自ら範囲を拡げて、男性たちの想像の世界にも、入りこんで来る。そうした処に初め

て、山越し像の画因は成立するのである。

だから、源信僧都が感得したと言うのは、其でよい。ただ叡山横川において想見したとの伝説は伝説としての意味はあつても、もつと切実な画因を、外に持つて居ると思われる。幼い慧心院僧都が、毎日の夕焼けを見、又年に再大いに、之を瞻みた二上山の落日である。今日も尚、高田の町から西に向つて、当麻の村へ行くとすれば、日没の頃を択ぶがよい。日は両峰の間に俄にわかに沈むが如くして、又更に浮きあがつて来るのを見るであろう。

もし韋提希夫人が行する日想観に当る如来像を描くとすれば、やはり亦波間に見える島山の上に、三尊仏をおくことであろう。そうした大水の、見るべからざる山の国では、どうしても、山の端

に來り臨む如来像を想見する外はなかつたのである。

さがみのくに

相摸国足柄上郡三久留部氏は、元來三廻部名みくるべみょうに居た為に稱し

た家名で、又釈迦牟尼しやくかむにぶつ仏とも書いて、訓は地名・家名の通りであ

る。恐らくその地にあつた仏堂の本尊の名の、顕れた為にさよう
訓よんだものだろうとせられている。併し、ここに一説がある。と

言うことは、釈迦三尊においても、阿弥陀像の場合のように、や
はり拜まれた場合の印象が、そうした特異事情を醸し出したので
はなかるうか。即、目眩めくるめく如く、三尊の光転旋して直視するこ

との出来ぬことを表す語とも見られるのである。即みくるべはめ
くるめ又は、めくるめきであろうと思ふのは誤りか。或は歴史地
理の説明にも少し骨を折れば、この考えなどは、たちまち忽消え失せるも

のかも知れぬ。が、あまり原由近似なるが故に、試みに記しておく。

私の女主人公南家藤原郎なんけいらつめ女の、幾度か見た二上山上の幻影は、古人相共に見、又僧都一人の、之を具象せしめた古代の幻想であつた。そうして又、仏教以前から、我々祖先の間に持ち伝えられた日の光の凝り成して、更にはなばなと輝き出た姿であつたのだ、とも謂いわれるのである。

青空文庫情報

底本：「昭和文学全集第4巻」小学館

1989（平成元）年4月1日初版第1刷発行

1994（平成5）年9月10日初版第2刷発行

初出：「八雲 第三輯」

1944（昭和19）年7月

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2007年2月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

山越しの阿弥陀像の画因

折口信夫

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>